
あたしの竜馬

竜門弥生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの竜馬

【Nコード】

N4685D

【作者名】

竜門弥生

【あらすじ】

幕末の英雄・坂本竜馬の妻・お龍。竜馬が本気で愛し、竜馬を本気で愛した女性。竜馬亡き後、夫・竜馬と過ごした日々を回想するお龍。竜馬との出会いから、寺田屋事件を中心に、お龍の視点から見た坂本竜馬への思いとは？坂本竜馬の妻としてのお龍の姿を書いてみました。ある方からのご指摘により、紹介文&文面を一部修正しました（平伏）

「竜馬、逃げてっ!!」

「お、お龍りょう!？」

自分の叫び声で、あたしは目を覚ました。

「……夢？」

部屋を見渡してから、あたしは小さなため息をつく。

「夢か……。」

“お龍”

夢の中で、あたしの名前を呼んだ男。あたしが生涯しょうがいのちで唯一ゆいいつ、本気で惚れぬいた人。今でも、あの人のことを思い出す。ずっと、ずっと、ずっと、愛してるから……。

「竜馬……。」

坂本竜馬。あたしが愛した自慢の夫。

「お龍さん！」

「・・・？誰だよ、あんた！？」

「わし、坂本竜馬言う者じゃ！お龍さん、わし、あんたに『ぷろぽおずう』をしに來たんじゃわ！」

「・・・はあ？」

「だから！わし、お龍さんに惚れたんじゃ！！」

「え！？」

「お龍さん、わしのまことのこもった『ぷろぽおずう』、受けてくれんかのう・・・！？」

初めてあの人と会った時、あたしは言葉を失った。

あたしの父さんは医者だったが、安政の大獄で連座され、そのまま獄死してしまった。父さんが死んでから、犯罪者の娘として、あたし達家族は苦勞に苦勞を重ねた。泣いてなんかいられない。やらねたら、やり返す！女だからって馬鹿にされないように、氣を強く持つて生きてきた。だからあたしは、滅多な（めった）ことじゃ動じない。それなのに・・・。

「わし、お龍さんの氣風（きふう）のよさに惚れたんじゃ！妹思いのあんたに惚れた！」

「・・・あんた、廓（くわく）の者・・・！？」

その言葉で、あたしはあの出来事を思い出した。

ある日、あたしのとこに知り合いが來て、あたしの妹二人が、遊郭（ゆうかく）に売られそうだと知らせてくれた。あたしは、側にあった包丁（つか）を掴むと、妹達の元へと向かった。扉を蹴り倒し、泣き叫ぶ妹達を抱き寄せる。驚く売人の喉（のど）に、あたしは持つてきた包丁を突きつけた。

「誰の妹を売り飛ばす氣じゃ！？そっちがその氣なら、あたしはお前（まへ）を殺して、磔（はりつけ）になつてやる！！いいや・・・刺し違えても妹は渡

さんよ!!」

「な、なんだ、お前は!？」

「この子らの姉のお龍じゃ!さあ、早く護身用で持ってる刀を抜かんかい!!これから殺し合いをするのよ!?大事な妹を廓にも、お前にも、渡してたまるか!!」

「ま、待つてくれ!落ち着い…………!!」

「ちよいとあんた!いきなりなにを!？」

「それはこっちの台詞じゃ、世話焼きババア!!そこで見てるお前らも同罪じゃ!!一人、二人、殺すのも同じこと…………!!あたしの妹達を連れて行くなら、まとめてこの場で殺してやるっ!!」

「だ、だれか役人を!」

「呼べ!今すぐ役人を呼べ、クソババア!!役人の前で、お前ら全員道連れにしてやる!!その体を切り刻んでやる!あたしの妹を奪う奴は、誰であろうとぶつ殺す!!」

「ひっ、ひい…………!!」

「わ、わかった!わかったからやめてくれ!金をやるから、あんたの妹を連れて帰ってくれ!!」

包丁を振り回して怒鳴り散らせば、その場の誰もがあたしに従^{したが}った。あたしは、『侘び料』として妹達の代金と、妹二人を家に連れて帰った。おかげで、あたしの妹を、遊郭に紹介しようとする馬鹿な輩^{やから}はいなくなっただけ…………。

「わしな、あんたの話を聞いて、あんたに会いたくなっただんじゃ!妹思いのあんたを、一目見てみたかったんじゃ!」

あの事件以来、目の前にいる男のように、あたしを見物に来る連中が増えた。客商売をしていたので、客が来ることは店の利益になった。その分、あたしの手間賃も増えるので好都合だった。でもたまに、あたしに好きだのなんだのと言い寄ってくる輩がいた。あたし

はその度^{たび}に、言い寄ってくる男供を追い返した。見物ついでに、女を口説く男に限って、ロクな奴はいやしない。だからこの時も、いつものように追い返そうとした。

「それじゃあ、見て気がすんだでしょう！？仕事の邪魔だから、さつさと帰って！」

「それは出来ん！わし、一目あんたを・・・お龍さんを見て、好きになってもうたんじゃ！」

「なによ、あんたあの売人から金でも貰ったの！？あたしを誘惑して来いとか言われたわけ！？」

「だから違うんじゃ！わし、人買いの知り合いなんぞおらん！純粹にお龍さんに誘惑されたんじゃ！！」

「あたしがいつ、あんたを誘惑したの！？」
「今。」

そう言って、なにかをあたしに差し出す。

「これ・・・。」

「わしから、お龍さんへの『ぶうれぜんとお』じゃ！」

「『ぶうれぜんとお』・・・？」

「贈り物じゃ！贈り物！！」

男が差し出したのは、小さな花束だった。それは、どこにでもあるような花もあれば、そうでもない花もあった。いろんな花が混じった花の束。それを、桃色の和紙に包んで、色鮮やかな紐^{ひも}で、変わった形に結^{むす}んでいた。

「・・・それが・・・これ？」

「そうじゃ！まあ・・・ちょっと、しょぼいけどなあ・・・。」

そう言つて頂垂れる姿に、あたしの情がほだされた。思わず、男の手から花束を受け取ってしまったの。あたしが受け取った瞬間、男の顔がパツと輝いた。^{かがや}

「気に入ってくれたんか!？」

「そうね・・・綺麗よ。」

あたしの言葉を聞いて、嬉しそうに、はにかむ男。ところが、何故か急に、悲しそうな顔でため息をついた。

「ど、どうしたの? そんな暗い顔して・・・!？」

相手の変化に、思わずあたしは聞き返していた。すると男は、少し拗ねたような口調で言つた。

「・・・わし、本当は、きちんとしたものを贈りたかったんじゃ。

でもな、用意してる間に、お龍さんを他の男に取られたらと思うと焦つてもうて・・・。」

「・・・え?」

「とにかくお龍さんに、あんたに惚れてる男がいるってことを早く伝えたかったんじゃ! でも、手ぶらで会いに行くのも格好がつかんから、喜んでくれそうなもんをいろいろ考えたんじゃが・・・。」

「・・・その結果が、これ?」

「これでもわし、頑張ったんじゃよ?」

苦笑いを浮かべる相手に、あたしも自然と笑みがこぼれる。

「なに言ってるの? これで十分よ。あたし、すごく気に入ったわ。」
「そう言ってくれるのは嬉しいが・・・やっぱり、わしの気がすま
んよ。本当はもっと良い物を、お龍さんに『ぷうれぜんとお』した

「かつたんじゃ・・・。」

「落ち込まないでよ！あたしは、これで満足してるんだから、それでいいじゃない！？」

「・・・すまん、お龍さん。今、手持ちがなくて・・・。わたしには、これが精一杯なんじゃ。」

「ちょ、ちよつと！お侍様が、自分の懷事情を、こんな人前で言っちゃだめでしょう！？」

「ええよ。見栄張^{みえは}つても、ないもんはないんじゃないから。」

「それにわたしは侍じゃない。坂本竜馬じゃ！わかりやすく言えば、優しいお龍さんに惚れた男じゃよ！」

「え・・・？」

（優しい？あたしが？）

「お龍さん、誤解せんでくれ！わたしは、どこの回し者でもない！ましてや、人買いの手先でもない！！」

「ちょ、ちよつと！」

「わたしは、純粹にお龍さんに惚れてるだけなんじゃ！！」

まっすぐな瞳^{ひとみ}が、あたしを見つめる。その瞬間、今まで感じたことのない気持ちにあたしはなった。返事に困るあたしに、あの人はまじめな顔で言った。

「わし、お龍さんを本気で愛しとるんじゃ！！！！」

店の中で、あたしに向かって大声で宣言する男。客も、店の子も、みんな呆氣にとられていた。大の大人が、人前で、それも本人の目

の前で、『好き』だと告白する。侍の格好をしてるのに、侍じゃないと言いきり、侍とは思えないほど、ほからかな態度を取る。聞きなれない言葉を使いながら、あたしに花束を贈る男。大人のくせに、子供のように頬を少し染めながら言う姿。ニコニコしながら、あたしの返事を待っていた。

そしてあたしは

「・・・なによ、『ぶろぽおずう』って。」

竜馬の言葉に、胸が熱くなっていた。

その日を境に、あたしは竜馬と会うようになった。竜馬は毎日、あたしに会いに来てくれた。店の者が、『あれは有名な、坂本竜馬だぞ!』と、騒いでたけど、そんなことあたしには関係ない。

「竜馬・・・あたしも、あんたに惚れた。」

相手がどんな男だろうが関係ない。惚れた相手が、『坂本竜馬』という名前と身分を持つてたっただけのこと。

「本当か!?」

「本当よ!・・・すごく大好き・・・!」

「じゃあ、愛しとるんか!?」

「うん、愛してる!-!」

あたしの言葉に、あの人は子供のように笑う。そして、力いっぱいあたしを抱きしめてくれた。やったぁーと、声を上げて喜ぶ竜馬。そんな竜馬に、あたしはすごく嬉しくなった。

「お龍！今日から、わしとお前はずっと一緒じゃ！！」

こうしてあたしは、竜馬が泊まっている『寺田屋』で、あの人と一緒に過ごすこととなった。竜馬と暮らし始めてから、あたしはあの人がすごい人だと実感した。みんな、竜馬を慕^{した}って集まってくる。竜馬に憧^{あこが}れ、頼^{たの}ってきた。あの人は、どんな人間でも拒^{こほ}まなかった。誰に対してもわけ隔^{へだ}てなく接する竜馬にみんな惹^ひかれていった。もちろんあたしも・・・！

「あたし・・・竜馬のこと、ますます惚れ直したよ。」

あの人の腕の中で囁^{ささや}けば、あの人もあたしの耳元で呟^{つぶや}いた。

「わしは、もつと惚れとるぞ。お龍のことが、大好きじゃ・・・」

ひとなつ
人懐^{ひとなつ}っこい笑みを浮かべて笑う竜馬。あたしも、それにつられて笑った。竜馬という時、あたしはいつも笑っていた。だって、とても楽しいんだもの。

誰からも好かれる竜馬。
だけど、そんなあの人を快^{こころよ}く思っていない輩^{やかい}もいた。

「わし、敵が多いんじゃ。だからお龍も気をつけてくれよ。」

お龍になにかあったら嫌じゃ、とあの人はぼやく。あたしはそれを、いつも笑い飛ばしていた。竜馬を殺す奴がいるなら、あたしが竜馬を守ってみせる。そう思っていた。

「間違いないのか？ここに坂本竜馬が・・・！？」
「確かめた！殺すなら今じゃ。」

だからその会話を聞いた時、あたしはすぐに行動できた。

その時、あたしはお風呂に入っていた。竜馬は二階で、仲間の三吉さんと一杯やっている。

そつと湯船から上がると、声のする方へと耳と目を向ける。するとそこには、浪人風の男達が話しこんでいた。

「奴は、我々に気づいていない。」

「よし、刀のサビにしてやろう・・・！」

（こいつら竜馬を殺す気だ！！）

考えるより先に、あたしの体は動いていた。風呂場から飛び出すと、いちもくさん一目散に竜馬のいる部屋に飛び込んだ。そして、愛しいあの人に向かってあたしは叫んだ。

「竜馬、逃げてっ！！」

「お、お龍！？」

あたしの言葉に、竜馬は飲んでいた酒を噴出ふきだす。側にいた三吉さんも、大げさにむせかえった。

「酒なんか飲んでる場合じゃないよ！早く逃げて！」

「逃げ・・・！？お、お龍、お前その格好　　！！」

「今風呂場で聞いたんだよ！浪人達が、あんたを殺そうとしてるの
！！」

「なっ・・・！？さ、坂本さんをですか！？」

「本当か、お龍！？」

「そうだよ！ほら、早く逃げて！刀はどこ！？また腰からはずして
！！」

咳き込む三吉さんと、目を見開く竜馬の頭を叩く。そして、無造作
に転がっている刀を拾って渡した。

「侍が、刀を体から離してなにやってんだい！？」

「怒るな、お龍！お前こそ、なにをしとるんじゃ・・・！？」

痛たた、と言いながら、羽織はおりっていた着物を脱ぐ竜馬。

「お前・・・裸はだかでここまで来たんか？」

そう言つて、あたしに服をかける。頭に血が上っていたあたしは、
竜馬のその言葉で落ち着きを取り戻した。

「ずいぶん、『さあびすう』したんじゃなあ？」

ゲラゲラと笑う竜馬。その横では、坂本さん、と真つ赤な顔で三吉
さんが注意する。

あたしは、竜馬のためなら、どんなことでもするつもりだった。だ
から、竜馬が笑った時、その耳を掴んで言つてやった。

「のん気に笑つてる場合！？あたしは、坂本竜馬のためなら、この
格好でどこだつて行つてやるよ！」

「い、痛たた！お、お龍・・・！」

「惚れた男のためなら、あたしは殺されてもいいんだよ！惚れて男を守るためなら、どんなことだってしてやる！」

「お龍・・・。」

「だから早く逃げてよ、竜馬あ！！」

竜馬のために、急いで来たのに。なのにあの人は、ぜんぜん危機感を持ってない。

「この馬鹿！あたしがどれだけ・・・！」

（どれだけ心配したのかわかってるの・・・！？）

自然と涙があふれてきた。その涙が、なにを意味しているかなんて、あたしはわからなかった。わからなかったけど

「・・・お龍、その浪人は、風呂場の側で話してたんか？」

「・・・そうだけ　　りよ、竜馬！？」

あの人はあたしの涙をぬぐった。暖かい・・・ゴツゴツとした大きな手で、あたしの涙をぬぐうと抱きしめた。

「お龍、すまん。お前が知らせてくれて助かった。」

そう言った竜馬の表情は、すごく真剣でまじめな顔をしていた。

「わしのために、泣いてくれとるんじゃない。お龍を泣かせたわしは、

悪い男じゃ。」

「竜馬・・・。」

「心配かけたな、お龍。」

その言葉で全部わかった。あたしが泣いてるのは、竜馬が原因。竜馬のことで泣いてるんだ。竜馬は、あたしの大事な人だから。心底惚れぬいた男だから。それほどの男だから。

「竜馬が死ぬなんて許さない・・・！」

「わしは死なんよ。お龍が、恥を忍んで知らせてくれたんじゃ。だから逃げるぞ。」

あたしの涙をぬぐいながら、優しい声であの人は言う。でもその顔は、いつもとは違う、【男の顔】をしていた。走ってきたせいか、あたしの胸はすぐドキドキしていた。でも、それだけじゃなかった。

「わしらは、このまま逃げる。慎蔵君、急ごう！」

「はい、坂本さん！」

「竜馬・・・！」

男らしい竜馬を見たせいだ。こんないい男、日本中探しても見つかりっこない。

そう思つて、ギュツと抱きつけば、竜馬も強く抱きしめてくれた。

「裏から逃げた方がいいな、慎蔵君？」

あたしを抱きしめたまま、竜馬は三吉さんに声をかける。目だけで竜馬を見れば、あの人は優しく微笑んだ。

「わかつとるよ、お龍。」

その言葉で、あたしの不安は吹き飛んだ。三吉さんも、竜馬の言葉で素早く身支度を整えた。

「さあ、急ぎましょう!」

そう言つて、三吉さんは部屋から出ようとしたんだけど

「待て待て!そつちじゃない!!」

「え!？」

「竜馬!？」

逃げようとする三吉さんに、待ったをかける竜馬。これには、あたしも声をかけられた三吉さんも驚いた。

「なにを言つてるんですか、坂本さん!？」

「そつよ!早く裏から」

「逃げるんはお前じゃ、お龍。」

「竜馬!？」

「いいか、お龍。お前は裏から逃げて、助けを呼んでくれ。わたしは、慎蔵君と一緒に行くからな。」

「助けて・・・!今逃げるつて言つたじゃない!?まさか戦う気なの!？」

「ノンノン!さっきも言つたが、わしらは逃げるんじゃないぞ?」

「でしたら、早く行きましょう!お龍さんの話では、奴らがここに

来るのも

「時間の問題じゃ。だから、あっちから行こう。」

そうやって、**竜馬**が指差した先には小さな障子。しょうじ

「窓から逃げるの!？」

あたしの言葉に、シーと、人差し指を立てながら竜馬は言った。

「大正解。さあ慎蔵君、夜の闇にまぎれようか？」

「なるほど！屋根から逃げた方が、下まで降りる手間がはぶけますね・・・！？」

「そういうことじゃ。お龍、お前も見つからんように逃げるんだぞ。」

L

「竜馬・・・。」

「お前になにかあったら、わしは嫌じゃからな。」

「だったら、腰から刀を離さないでよ！あたしだって、竜馬になにかあったら嫌よ！？」

「刀がなくても平気じゃ。これをかませばいいんじゃないから！」

そう言つて、懷ふところから黒く細長い物を取り出す竜馬。変な形をした鉄

の塊に、あたしは首をかしげる。そんなあたしに、竜馬は満面の笑みで言った。

「西洋式の武器じゃ。これはすごいぞー！ どんだけすごいかは、今度教えてやるからな！」

「馬鹿！この生き死にかかつてる時に、なにのん気なことを・・・」

!

「平気じゃ！ 弁天様の裸も拝めたからの〜？」

「竜馬っ！」

助平^{すけへい}な笑いをする竜馬に、あたしは声を荒げる。そんなあたしに、怖い怖い、と茶化す竜馬。

「坂本さん、お龍さんも！痴話喧嘩^{ちわげんか}はそこまでにしてください！！」

あたし達のやり取りに、痺^{しび}れを切らした三吉さんが声をかける。

「すぐ行くよ、慎蔵君。じゃあな、お龍。」

そう言うと、あたしに口付ける竜馬。人前でされたことと突然だったことで、あたしは顔が熱くなった。

「これも西洋式じゃ。」

口をパクパクさせるあたしに、あの人はにっこりと笑いかける。そして竜馬は、素早くあたしから離れた。

「愛しとるぞ、お龍。」

そう言い残すと、夜の闇へと竜馬は消えてしまった。

あの人の行動に、あたしは呆氣にとられた。でもすぐに、部屋からも、池田屋からも飛び出した。竜馬がくれた着物を羽織^{ひも}、そこら辺に干してあった紐^{ひも}をかつぱらって腰に巻いた。

（あの助平！助平！助平竜馬！！）

三吉さんの目の前で接吻^{せつぶん}なんかして！なにが西洋式よ！？人が心配

してるのに！

頭の中は、竜馬のことであっぴい。竜馬に対する怒りや愛情、喜びや戸惑い、いろんな感情があたしの中に渦巻く。そんな気持ちを振り払うように、あたしは夜道を走った。

竜馬のために

．．．！！

その後、あたしと竜馬は結婚した。竜馬と一緒にいる時間は少なかったけど、それでもあたしは幸せだった。心のままに、笑って、泣いて、怒って、笑って．．．。

「新婚旅行じゃ！」

一緒にいけないあたしのために、竜馬は二人だけの時間を作ってくれた。夫婦水入らずで過ごすために、『新婚旅行』と言って、あたしと竜馬は旅行に出かけた。

めまぐるしく変わる世の中で、これほど穏やかで、幸せな時間が過ぎせるなんて．．．。

「わしらは幸せじゃな、お龍！」

「幸せよ．．．竜馬。」

竜馬が与えてくれる幸せが、永遠に続くように思えた。

竜馬が夢見る、争いのない、みんなが平等に暮らせる世界。身分や格式にとらわれず、平和で幸せに暮らせる世の中。坂本竜馬なら、それを実現させるとあたしは信じていた。本気で信じていた。

竜馬のことを

．．．．．

「竜馬．．．。」

枕元に置いてある包みに手を伸ばす。

「なんで、死んじゃったのさ．．．。」

あんたが死んだと聞いた時、あたしはあんたが死んだなんて信じられなかった。

「馬鹿だねえ．．．あれほど、刀を腰から離すなって言ったのに．．．。」

信じられなくて、あんたに会いたくて、あんたの側に行こうとした。

「どうして、女房の言うことをきかないのよ．．．．！」

でもあたしは、竜馬の死に顔を見れなかった。

「男同士で心中なんて・・・浮気もいいところじゃない？」

怖くて見れなかったんじゃない。

「もう・・・何年経つのかね。あんたがいなくなつて。」

あたしはそんな弱い女じゃない。

「竜馬・・・今日ね、あんたの『仲間だと言つ奴ら』に会つてきたよ。」

竜馬の葬儀に行くことも、出ることも、坂本竜馬の仲間達が許さなかった。

「あんたが死んだ時、あいつらはあたしに・・・竜馬の葬儀に来るなどと言つた。あたしを『坂本竜馬の妻だと認めない』だつてさ・・・！」

妻である、正妻であるあたしに、坂本竜馬の葬儀に来るなど、あいつらは言つた。

「それが今になつて、『坂本竜馬先生が、愛した人だから出てほしい』だつて。あいつら、世間の目を気にして、あたしにそんなことを言つてきたんだよ？馬鹿馬鹿しくて、笑えやしない・・・！」

竜馬の周りの男達が、あたしを嫌っているのは知っていた。嫌いなら、嫌いなままでいい。無理して、好かれる必要なんかない。

「竜馬・・・あたし、悔しくなんかないからね。」

あたしは、竜馬に愛されていればそれでいいの。

「竜馬……今のあたしでも、愛してくれる……？」

ゆつくりとした手つきで、お龍は布の包みをひもとく。

竜馬が死んでから、周囲の勧めもあつて、あたしはあの人の実家に行つた。あの人が育つた土佐の地で、残りの人生のすべてを、夫・坂本竜馬の供養にささげようと思つた。

だけど

「いくら弟の嫁だつていつても、もう我慢できないね！この性悪女！！今すぐ出て行きな、クソガキ！！」

「その言葉、そっくりそのまま返してやるよ！クソババ！！竜馬の姉じゃなかったら、足腰立たなくしてやつてさ！」

あたしは竜馬の家族と……姉の乙女とうまういかなかった。仲良くやろうと努力はした。でも、あたしも乙女も気が強い。そして思つたままのことを口にする。乙女が、あたしをどう思っているかなんてわからない。だけど、竜馬を慕う志士仲間から、あることないこと聞かされていたらしい。『お龍』を嫌っている連中から聞いた話。坂本竜馬を尊敬し、敬うもの達から聞いた話。だから乙女は会う前からあたしを嫌っていたんだ。あたしがどんなに『義妹』として慕つても、あの女があたしを『義妹』と認めることはなかった。結局、乙女義姉さんと喧嘩をして、あたしは土佐を飛び出した。

みんな……誰もあたしを助けてくれない。

竜馬の仲間も、家族も、誰も……あたしを助けるはずがない。

「あたし・・・妬ねたまれてたみたいだよ。坂本竜馬が、一番愛する人間だったから・・・。」

苦しい生活の中で、町から町に流れ・・・横須賀にたどり着いた。そこであたしは、呉服商人をしている男と結婚した。

竜馬以外の男と結婚した。

竜馬以外の男の妻になった。

竜馬以外の男に体を許した。

生きていくために、竜馬以外の男に身を売ったの。

「あたしを『養ってくれてる男』は、あたしのことが好きなんだって。」

呉服商の男は、あたしを大事にしてくれた。あたしに一目惚れして、毎日あたしの仕事場に通ってきた。

「変なところが・・・あなたと同じだよ、竜馬。」

包みの中身を取り出し、それを手に取るお龍。

「あんたが死んでから・・・あたしは酒びたりの悪妻になった。『ひどい女』っていう、烙印らくいん押されてるんだよ・・・。」

好きでそうなったわけじゃない。

竜馬以外の男と一緒にになった自分が許せなかった。

竜馬を忘れようと、気をまぎらわそうとお酒に手を出した。

「その結果が、手のつけられない悪妻なんてさ・・・！」

お龍の頬を涙が伝う。その雫は、彼女の手の中へと落ちた。怪しく、黒光りする塊の上へと・・・。

「これは、西洋式の鉄砲で、『銃』というもんなんじゃよ！」
「こんな短いのが・・・！？」

短筒たんづつを見せながら、竜馬は子供のように笑う。

「お龍、これお前にやる！」

「はあ！？鉄砲をあたしにいゝ？」

「これな、鬱憤うつぶんがたまった時にぶちかませ！スカツとするぞ！」

「竜馬、これはあんたが大事にしてるもんでしょう？それを、あたしなんか」

「お龍だから、やるんじゃ！わしはもう一つ持ってるからええんじや！」

「だけど　　！」

「いいから、いいから！わしは、お龍が大好きだからやるんじゃぞ！？」

「もう！なにかって言うと、好きだのなんだって　　！」

「言える時に言いたいんじゃ！手紙で書くより、面と向かって言った方がいいじゃろう！？」

「竜馬・・・。」

「それともお龍は嫌か！？こういうわしは・・・？」

しょんぼりとする竜馬。あたしは、そんな夫が愛しくて、嬉しくて、本当に

「大好き。」

そう言つて、口付ければ、竜馬は真っ赤になった。

「お、お龍！？」

「これが、『西洋式』なんでしょう？」

「ううゝ・・・！ お龍にはかなわん！！」

降参こうさんとばかりに、両手を挙あげる竜馬。万歳ばんざいをした手は、そのままあたしを捕まえた。

「お龍、大好きじゃ！」

「あたしも竜馬が好き！」

「わし・・・お龍には、本当に一目惚れだったんじゃないぞ？」

「あたしも。」

「本当か！？」

「あたしが、嘘言つてる風に見えるわけ！？」

「見えん！！」

お互いに、強く抱きしめ合う。ずっと、ずっと、愛しい相手を抱きしめた。

「竜馬・・・あんたが死んだのは、あんたがいけないのよ。」

竜馬からもらった鉄砲を握り締める。

「『寺田屋』の時みたいにな、あたしを側に置かなかったのがいけないのよ。」

形見となった銃は、とても冷たくて、熱くなったあたしの心を冷やしてくれた。

「あたしを連れて行つてれば、『寺田屋』の時みたいに助けたのに・・・。」

“ 竜馬、逃げてっ！！ ”

“ お、お龍！？ ”

さつき見た夢を思い出す。寺田屋での出来事。
今でもあたしの夢に出てくる、懐かしい思い出。

竜馬が死んだ日。あの日、あの場所にあたしがいれば
！！

「竜馬は絶対・・・死ななかつた。」

あたしが竜馬を守ったのに・・・！！

「竜馬・・・あたし苦しいよ。」

あんたが、あたしを好きだって言ってくれた時みたいに、すごく胸が熱いよ。

だけど、あの時みたいに嬉しくもなんともない。毎日、つらいことばかりだよ。

「とにかく、落ち込んだ時に打ってみろ！」

そう言つて、渡された銃が、竜馬からの最後の贈り物。あたしはそれを強く抱きしめた。

竜馬が死んでから、日本は大きく変わった。平等の世界に程遠い。どいつもこいつも、戦争、戦争で喧嘩ばかり。血みどろの争いをしてる。あんたの仲間だった連中も、志士も、同志も、子分も、信者も、盟友も、みんなみんなみな
！！

「・・・いいこと思いついたよ、竜馬。」

そう呟くと、銃を持って、そつと部屋から抜け出すお龍。

「竜馬・・・『ここに来てる』なら見ててよ・・・。」

あたしは今、あんたが死んで、その何回忌目をしのぶための祭典さいてんに来てるの。年数なんて数えてないよ。だって、【裏切り者達】が決めた『パフォーマンズ』なんだから。

あたしは、その見世物として招待されたの。

「フッフ・・・まだ起きてる。」

洋式の建物の無数にある窓の一つ。そこだけ、明かりが灯ともっていた。その部屋は、竜馬の部下だった男が使っている部屋。

「全員いるみたいね・・・。」

窓に映る人影を数えると、銃に弾を込めるお龍。

散々人を馬鹿にしておいて、今頃になってから『坂本竜馬の妻』として認めるという連中。

「あたし・・・ずっと気に入らなかったのよね。」

月明かりを頼りに、銃口を的へと向ける。

“これな、鬱憤がたまった時にぶちかませ！スカッとするぞ！”

「周りになんて言われようが関係ないの・・・。」

見栄や外見、体裁ていさいばかりを気にする卑怯者の、小心者共！

「あたしは坂本竜馬の妻・お龍・・・！」

周りの許可なんて要らない。竜馬だけに必要とされればいい。あたしが望むものは竜馬との愛だけ。

「坂本竜馬に愛され、竜馬に妻として認められた女
！」

積年せきねんの怒りと、恨みと、悲しみと、苦しみをこめて引き金に引いた。

ガラスの割れる音と共に、絶叫が館中に響く。
それを聞き届けると、上機嫌で彼女はその後にした。

坂本竜馬の死後、彼をしのぶ会が開かれた。
竜馬を慕う男達は、久しぶりの再会を果たし、思い出話に花をさかせた。彼らは夜中まで酒を酌くみ交かわした。話題は、坂本竜馬のこと

から、今後の政治、経済、女の話へと変わる。
そして、偉大なる坂本竜馬の話に戻した時だった。
銃声と共に、窓ガラスが割れ、部屋の中のシャンデリアが落下する。
そして、部屋は漆黒の闇に包まれた。突然のことに、逃げ惑う者、
腰を抜かす者、怒鳴り散らす者で、部屋は大混乱になった。
結局、狙撃をしてきた犯人はわからずじまい。無論、犯人を捕まえることはできなかった。そのため、この出来事は公にされることはなかった。

ただ……彼らの部屋に打ち込まれた銃弾を見て、誰もが凍りついた。

「おい、この弾は……！」
「間違いない……！坂本先生が使われていた銃の弾だ……。」
「誰かのいたずらじゃろう!？」
「馬鹿言え！この型は古いから、もうどこにも売ってないし、政府でも取り扱っていないんだぞ!？」
「そ、それじゃあ……！ば、化けてでられたのか!？」
「竜馬がか……!？」
「まさか！そんな非科学的なことが……!？」

言い知れぬ恐怖を覚え、その場にいた全員が口を閉ざす。

その後、坂本竜馬をしのぶ会は無事に閉幕した。
あの晩、部屋にいた誰もが、無言のままそれぞれの岐路へとつく。
そんな中、ただ一人、『坂本竜馬の妻』だけは、満足そうに帰って

い
っ
た
の
だ
っ
た。

（後書き）

最後まで読んでくださり、ありがとうございました！！

坂本竜馬の妻・お龍さんについて書いてみました。短編として書いたのですが、長々と書いてしまいました・・・その点が、ちょっと反省です（大汗）

今回、竜馬とお龍を題材にして書いたのですが、少し、オリジナルで書いてみました。坂本竜馬は、個人的にすごく好きで、その妻であるお龍さんもちかなり好きです。だから、短編という形で、お龍さんを主人公にして書きました（照）

お龍さんが、竜馬の仲間に嫌われていたのは知っていましたが、竜馬の姉・乙女と仲が悪いというのは知らなかったです・・・。今回、この小説を書くにあたり、いろいろ調べているうちにわかったんですよね・・・（汗）ただ、お龍という人間を調べていくうちに、この人が本当に愛していたのは『坂本竜馬』だけなんじゃないかと思えてなりません。

いろんな意味を込めて、竜馬とお龍が、死後の世界で仲良く暮らしていることを願います・・・！！

誤字・脱字・史実と違うという点を発見された方、こっそりでいいので、教えてください・・・！！よろしく願います・・・！！ご連絡をいただき次第、即座に訂正いたします（下記）

ある方からのご連絡により、2008年 01月 17日に本文

の一部を修正いたしました（赤面）

そして本日、2010年6月9日、2009年10月16日にご連絡頂いていた方からご指摘により、後書きを一部訂正いたしました（大汗）！！

後書きで、【坂本竜馬が暗殺された事件】を『池田屋事件』などと書いてしまいましたか・・・

正しくは『近江屋事件』でしたー（赤面）！！！！
ごめんなさい・・・！！

後書きの間違いもそうですが、ご連絡頂いたことにまったく気づいていませんでした・・・（大汗）

親切で教えてくださったのに、気遣いとかお馬鹿過ぎます・・・本当にすみません・・・！！

本当に申し訳ありませんでした（土下座）！！！！

そして、ありがとうございます（感涙）

間違つて、覚えてしまった方、心より、お詫び申し上げます・・・

（土下座）！！

ご指摘くださった方のお名前は、その方のプライバシーを考え、前回同様この場では伏せさせていただきますが、本当にありがとうございます！！！！教えてくださった方、ありがとうございます！！！！なのに、気づくのが今頃と言うのは・・・笑ってください・・・（泣）

そして、なにも知らずに読まれた方！！真に申し訳ありません！！本当にごめんなさい！！誤報を伝えてしまいました！！池田屋は新撰組関連の事件ですので、正しくは近江屋です！！読んでいておかしいと思いましたよね！？竜馬ブームで読み込んでいらっしゃる皆

さんに、失礼なことを・・・！！
本当に、お騒がせいたしました（平伏）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4685d/>

あたしの竜馬

2010年10月15日21時40分発行